

高等女学校の研究

— 高女卒業生のアンケート調査から —

新井 淑子 館 かおる 西村 絢子 ○福田 須美子 ○山本 礼子
 (埼玉大学) (お茶の水女子大) (日本女子体育大) (成城短期大) (和洋女子大)

高等女学校は、近代公教育成立以来男女別学体制による女子中等教育の中心的存在であった。そこでなされた教育がどのようなものであったか、また、それが、生徒達の生き方にどのような影響を与えたか、このような視点からの研究が、従来の行政面からの教育史を豊かにするものと考え。3年前から各学校史を蒐集し、これの分析を行なってきている。

この度、それらの学校の卒業生が、高齢化するなかにあって、彼女たちの生の声を集録し、学校史を裏付けつつ、高等女学校生活を再現する目的をもってプロジェクトを企画し、アンケート調査を実施した。

今回は、主として、単純集計によってでてきたものについて概観し、さらに時代別、高女の類型別に分析することを目的とする。

1, 調査方法

1)対象 調査依頼に応じた29校の高等女学校卒業生の中から、1910年から5年おきに各年度30名を無作為抽出、郵送法によるアンケートを求めた。

2)期日 1986年1~3月

3)回収状況

総発送数	5,303
実質発送数	4,784
有効回答数	1,610
回収率	33.7%

2, 結果・考察

1)高女生の生活基盤 アンケートに記

載された親の職業を概観し、彼らの出身階層が1920年代以降中間層に拡大していく傾向が見られる。高女生の家族構成は、2/3は核家族である。これを、高女令期までにできた学校をI型、実科高女で創立し、後に県立に移管したものをII型、高女就学率急上昇に伴う入学難を緩和するため創設した学校をIII型として類型別にみると、さらに特色が見出せる。

2)高女生の意識・卒業後の進路 高女進学意志決定は8割以上が自分自身であり、親のすすめがこの意志決定を強固なものにしたとみられる。ここにも類型別差異がみられる。

卒業後の進路は就職や進学が漸増する。進学状況は類型別特長がみられるが、職業生活経験の数は、年代による増加が顕著であり、ちなみに数値を示すと5年ごとに10%内外の増加率を示すほどである。しかし、一方で「女が仕事をもつ」ことに親および世間一般の反発があり、そのことが果たせなかった者、家庭に入るのが当然だと考えていた者も少なからずいたことも伺える。職業生活に打ち込んで独身生活を送った者、結婚生活と両立させた職業婦人、ボランティアで社会活動をする者等等、高女卒業生の自立意識の旺盛さは、アンケート用紙の欄を埋めつくしている自由記述の文章から伝わってくる。高女生は各種の制約を受けながらも、彼らの青春を謳歌し、その後の生き方を積極的に選択していったとみられる。これらは、自由記述の分析にまつ。